〈研究論文1〉

西田哲学と精神分析の基本構造について

石崎恵子

1. 比較の視座——はじめに

ジークムント・フロイト（一八五六～一九三九）が西洋の伝統を根底から問い直すようにして創始し多様に発展した精神分析のうちでも、「フロイトへ還れ」の標語を掲げて、その理論を図式化してみせたジャック・ラカン（一九〇一～一九八一）による論理構成と、西洋哲学と対峙し、初めて日本独自の哲学を打ち立てたともいわれる西田幾多郎（一八七〇～一九四五）による論理とを比較する。これにより、彼らの独特な論理構成の共通した特色が浮き彫りとなるのみならず、どこに分岐点が存するのかについても見極めることが可能となる。

これまで、豊富な臨床経験に基づきラカンに西田を対抗させる研究や[1]、ラカンの理論をもって西田哲学の解説にあてる研究[2]、あるいはまた、受容史の観点から西田に期待を寄せる研究などがあり[3]、重要な指摘が行われてきた。しかしいまだ、基本構造を比較した研究はない。

今回、基本構造と呼ぶものは、まずラカンが第一義的なものであるとした「シニフィアンと主体の関係」[4]であり、したがってそれについて詳しく扱った基礎講義『精神分析の四基本概念』を主に取り上げる。西田では、自ら「根本思想」とした「絶対矛盾的自己同一」以降を中心とするが、初期作以来、「根本の精神」は変わらず、長年その論理を工夫してきたという西田自身の証言を尊重し適宜遡って追及する[5]。

構成としては、節ごとの表題が次のようになっている。節番号〔比較する共通項〕—対応する〔ラカンの用語〕〔西田の用語〕、の順である。共通項をもって相同性のある「基本構造」としなが

ら、それぞれの用語の指示対象から導かれる相違性をあらかじめ示しているものである。

2．「一」――「無意識」と「無」

精神分析は「無意識」という概念を扱うことで知られ、西田哲学は「無の哲学」とも称される。無の実在視、などといった誤解を避けるためにも、まずここでは、その簡略な概念史から定義を確認することで、「無」なるものを扱う方法を明らかにしていこう。

フロイト以前にも「無意識」という言葉はあった。ラカンによれば、フロイトが発見したのは「無意識の次元には主体の水準でおきていることとあらゆる点で等しい何かがある」ということだという。[6] これが一体いかなることなのか、本論に展開する西田哲学との比較が理解の助けともなるはずである。

さて定義としての無意識の出現形態は、「一」の線によるものであり、「開口の線」としての「一 un」が「無意識 Unbewusste」の「無 Un」「不在」を出現させる。[7] それゆえに、「無意識は存在するものでもなく、存在しないものでもなく、実現されないものに属している」[8] という。「一」は5．に検討する「シニフィアン」が対になったものであり、原初に刻まれ以後連鎖する、言語の世界への参入を記し付けるものでもある。

一方、西田もしばしば「無意識」という語に言及しているが、端的にいえば、自身の主張とは異なるものとしている。[9] ただし、その内実を探れば、実はラカンが「フロイトの無意識」として他の「無意識」と区別したものの様態が、西田の主張する「絶対無」を経て「絶対矛盾的自己同一」へと結実した理論と同様の構造をなしているといえる。

その定義とは、「絶対矛盾的自己同一の世界」は「どこまでも自己同一をもつことはできない」というものである。「内在的に自己同一的に見るということは、それを抽象化すること」である。それが「無い」として否定することによっても抽象化されてしまうということである。[10] だが、それでは西田は、「抽象化」や次節に詳述する「対象化」を拒むのかというと、そうではない。それに拘泥することに注意を促す一方で、抽象論理が「否定的契機」として、対象論理が「自己限定の契機」として、「表現的に」含まれているというのが、西田の論理の要である。[11]

以上のように、両者が「無」なるものを扱う際には、それを決して自己同一的な実体として捉えているのではなく、何らかの限定の際にいわば後から掴むことができるものとして、であることを確認した。しかし、なぜ「無」が問題となるのか、そのような「無」が我々にどのような関係があるのだろうか。

3．「視界から消える」ゆえに「無」
――「他者」と「他」

ラカンは「自分を見ている自分を見る」という事態を「意識の錯覚」であると断じている。[12] その錯覚を支えるものは、「眼差し」の特殊な性質であるという。[13] 眼差しは「主体が成立するために手放した器官としての何か」である「小文字の他者 autre・対象 a」を含み持つ[14]という。いかなることか。まず、「眼差し」と「目」とが分裂している点が重要である。通常の感覚に置き換えて解説するならば、「眼差し」は「見られている」という意識と解すればよい。そのことを意識するためにも、まず「眼差し」が「自分」と関係していなければならない。そして次にこの眼差しの位置に自分の目（他者の目であってもそれは想像的なものであるからには「自分の目」であるといえる）を重ね合わせることによって「自分を見ている自分を見る」という錯覚が完了する。このとき、自分は「眼差し」という他者の位置へと移動するため、本来の位置からは分裂しているのである。このような「対象 a」としての「眼差し」の機能は実はあらゆる精神活動の根底にあるというのだが、まずは無意識へと「一」が刻まれる原初の場面にこの機能が働いている。「眼差しとしての対象 a」は、この「一」の導入の結果、分裂した元のもの（$\$$）と斜線で消された形で表される）の印として生成された残滓でもあり、欲望の原因ともなる。「自分を見ている……」の例で確認したように、この「対象 a」の位置へと主体は常に「落下」しそのことに気付かない構造があるのだとラカンは言う。そして、こうした「眼差し」の機能による「無知」があらゆる思想の進展や世界観の形成に見られたものだともラカンは指摘している。[15]

こうした論理に基づきラカンは、「デカルトの間違い」を、「我思う」こそが「知であるとしたところ」つまり、「確信について何か知っていると言ったこと、〝我思う〟をたんなる消滅の点にしなかったことにある」と述べている。[16]

西田もまた、デカルトのコギトについて、同様の見解を示している。「彼の懐疑の刃は論理そのものにまで向かわなかった。真の自己否定的自覚に達しなかった。彼の自己は身体なき抽象的自己であったのである」というわけだが、それというのも、

> 認識論者が知るという時、既に対象認識の意味に限定しているのである。知る者そのものは既に除去せられているのである。しかし知るものなくして知るということは考えられない。此に深い矛盾がある、問題がある。しかも一度対象認識の立場に立った以上、何処までも知るというものは視野に入って来ない。[17]

というように、何かを対象的に知るという場合、我々の視界から消えるものがあるという点で、ラカンと認識を同じくしているということがいえるであろう。だが、ラカンが消滅の点とした事態

を捉えて西田は「真の自己否定的自覚」としている。そのような自覚とは、

我々の自覚というのは、単に閉じられた自己自身の内において起こるのではない。自覚は自己が自己を越えて他に対することによってのみ起こるのである。我々が自覚するという時、自己は既に自己を越えているのである。[18]

と述べるように、――ラカンと同じく――「他」に対することによってのみ起こるというのである。更にこの「自覚」とは、西田によれば「表現するものが表現せられるものである」即ち「矛盾的自己同一」という形式をもつが、この形式が我々の世界には「いつも何処かにある」とするのである。[19] この「矛盾」に、$\mathcal{S}$と対象aの「分裂」を重ね合わせることができるのが分かるであろう。

こうして、ここでも同様の構造、即ち、我々の認識活動には消滅する何かがあるのであり、その何かとは、ラカンによれば「眼差し」「欲望の原因」であり、西田によれば「知るものそのもの」「論理そのもの」である。特にそうした認識活動は、「他」なるものを通してのみ、作動し始めるという構造を持っている。

したがって、その内実は、単に視界から消えるものを追い求めるというよりも――なぜならそれは常に焦点を合わせようとするやいなや消え去るもの[20]である――むしろ、その作動を通して実践するという戦略[21]を両者はとることになる。それが集約されているのが、「映す」という機能である。

4. 「映す」――「欲望」と「欲求」

ラカンによれば「眼差し」とは、自分を認識する際に必要とするものであるが、[22] この「眼差し」の下にあることには、「満足」があるとされ、ラカンの初期の理論である「鏡像段階（鏡に映った自己像にナルシシズム的な同一化を示す段階）」と重ねあわされている。[23] つまり、眼差しの機能とは、自己を投影するものであるのだ。しかし、注意しなければならないのは、現実には、眼差し自体は決して像を結ばない。鏡の中に捉えることのできないものだといわれる。ただその眼差しの下に落ちることによって、満足を得るのみである。したがってこうした境涯は、あくまでも幻想であるが、それによって主体は成立しているという理論である。[24]

西田も同様の見解を示しているといえる。即ち、「鏡」のメタファー[25]を「意識面[26]」を説明する際、「欲求」「満足」を伴うものとして、[27] 同一性を確保する方法的基盤として使用している。初期から「鏡の如く」「映すこと」を「構成すること」と説明していた[28]が、それを保持しながら後期では「場所的絶対有」そして「自己同一」について表す際に用い、[29] とりわけ、その「映すこと」とは、「自己否定」的な営みである。なぜ「自己否定」なのか、それは映したものは、それ自体ではないからであるといえる。しかし映されたものとは確かに対応関係をもっている。このことを「即」

ではなく「即非」としているともいえるであろう。[30]

だが、「欲望」「欲求」が介在する点からも予感されるように、ここには、単に「映す」ことによる静謐な対応関係があるのみではない。

他を映すということは、何処までも自己に対立するものを自己の中に含むということでなければならない、非連続の連続といふことでなければならない。[31]

というのだが、これとラカンの次の解説を比較してみよう。

反復は新しいものを要求します。反復の中心はこの新しいものを自らの次元とするような遊びです。[32]

これら――――は対応していると考えてよいだろう。――線部、「反復」は、先述してきた「映す」ことによる主体の形成過程の本質としてラカンが注意を促しているものだが、フロイトによって発見された「反復強迫」の含みをもつものである。それは苦痛の反復である。片やそれが西田における「時の形式」や「世界の自覚」とも関係する「非連続の連続」と対応しているのは興味深いが、ここで深入りすることはできない。確認しておくべきは即ち、両者は、この映す機能の本質を、ある種の繰り返しを本質とし、しかもそれは単なる繰り返しではなく、他の新たなるものを取り入れることとして捉えているということである。

以上のように、「映す」「表現する」という両者の論理にとって中心に据えられた契機は、第一に、欲求・欲望に動かされている、そして第二にそれは、自己にとっては創造であるのだということである。

しかし、それは欲するのみで、いわば捏造のようなものなのであろうか。次に、実在との関わりから「表現」の問題を検討しよう。

5．「表現」
――「シニフィアン」と「個物」

「無意識の実在論」[33]「観念論の直面する困難」[34]に言及するラカン、「現象即実在」[35]「単なる唯物論も観念論も制作を説明し得ない」[36]とする西田だが、この問題が先鋭化されているのが「表現」の問題であり、この結節点となっているのが、ラカンの「シニフィアン」西田の「個物」概念であるといえる。

「シニフィアン」とは、元は構造主義の祖でもある言語学者のソシュールが提唱した言語の理論の中心的な概念で、シニフィエ（意味されるもの）に対応する「意味するもの」を指している。このシニフィアンの機能を、ラカンはフロイトの理論の根本として読み取った。ラカンによるシニフィアンの定義は、シニフィエに対するシニフィアンである以前に「他のシニフィアンに対してシニフィアンである」というものである。[37]このような条件下の原初に、対をなす関係こそフロイトのいう「Vorstellungsrepräsentanz 表象の代理」であるとし、これが2．において紹介した

「一」であるという。[38]

シニフィアンは「共時性」と「通時性」という時間性をもつ。[39]このシニフィアンがもたらされる無意識はそれ自体としては無時間的でありながら、「ほんの瞬間垣間見えるもの」とされる。これは元々フロイトの「判断の時」を巡る証言とも連関しており、[40]ラカンがこの時間論に基づき、他者の中における主体の決断を巡る論文を著していることも有名である。[41]フロイトがそうした時間の観点を含む臨床実践の中で提示した「Wahrnehmungszeichen 知覚記号」こそ、ラカン曰くシニフィアンであるという。[42]これは、知覚が意識へ至るまでに介在するものである。ここで重要なことは、記号化の際には、何かが変化していながら、同時に、対応関係をもっているという点である。[43]

西田において同様の形式を探るならば、まず繰り返し述べられる「個物は個物に対して個物である」という文がそれにあたるであろう。これは「世界と世界との対立的関係」をいう。[44]つまり、個物とは、世界を表現すると共に意識作用でもあるため、意識は「表現作用的個物」であるといわれる。[45]このような世界にあって「抽象作用とは表現作用的自己が記号的に世界を映すことである（即ち言語的に）」[46]としていることからもこれまでの論証を裏付けるものであろう。表現とは何なのであろうか。

モナドは世界を映すと共に、世界のペルスペクティーフの一観点なのである、表出即表現である（exprimer = répresenter）。しかも真の個物はモナドの如く知的ではなく、自己自身を形成するものでなければならない、表現作用的でなければならない。[47]

このように西田は、ライプニッツの「表現」概念をうけて、それに更に「有」ではない「無」の観点を導入することで「事そのもの」と「時」を含む「実存的」な「自覚」を引き出す。[48]そして「一々の事実が単なる事実ではなく、世界の自覚を意味している」[49]という実在観を主張するに至る。換言すれば、即ち、知覚されるからといって実在するというのではなく、つまり知覚する主体が別にあるというのではなく、そのもの自体が「知」（西田が知覚と訳すライプニッツの perceprtio 表象）とは別に自己自身を形成していることがむしろ我々の意識にのぼった表現なのだということである。

西田が踏襲したというライプニッツによる「表現」の定義は「一つのものと他のものとの間に、不変なる規則正しい関係が成立する時、一が他を表現する」[50]というものだが、それによれば、その「表現」とは perceptio とも関係し、exprimer と répresenter と、ほぼ同じ意味で使われているものであるものの、上記の定義からしても一義的には「対応関係をもつ」といういわば「状態」を表すのが意味の中心である。[51]ところが、「表現する」という日本語の能動的な語感が寄与したのか、あるいは言葉がむしろこうした事態を掴んでいるというべきか、[52]西田はこれを特に

「形成」と結びつけるのである。そこには「時」が含まれているともいう。

一方、ラカンは、先述した時間論を「事物の持続」と区別して「論理的時間」と名付けている。これは実在との関わりにおいて、西田との興味深い対比が予感されるが、紙幅の関係上、稿を改めざるを得ない。しかし、ここではその考察の土台ともなるであろう、立脚点の相違を指摘することができる。

論拠を列挙していこう。まず、①一連の過程を説明する際に、ラカンが好んで使う語が「exprimer 表現している」というものである。これは単なる偶然とばかりはいえず、むしろ事態の共通性を示しているといえないだろうか。ラカンのそれは、〝彼らが症状として exprime 表現しているのは……〟と、基本的には観察の立場からでもあり、同時に、その当事者の無意識からの訴えとも取れるものである。[53] また、②「～に対して～」という形式をもつものが、西田においては、ラカンにとって獲得された結果であるはずのものについて、つまり「個物」についてであることからも、ラカンはあくまでも分析家の立場、西田はいわば当事者の立場にいると考えられる。即ち、ラカンにとってシニフィアンはもたらされるものであると同時に見極めるべきものであるが、西田にとって表現はもたらされるものであると同時に自ら表現するものでもあるという違いがある。だが、③両者が時間の観点から、その置き換えの必然性を主題にしていたことからも、西田における実在という問題性が、ラカンにおいてはとりわけ言語の問題とされている。このことから、西田の「表現」には、ラカンが換喩的だという欲望の機構[54]が、無意識的にではなく、自覚的に、働いているともいえるのではないだろうか。西田の「自覚」とは「表現せられるものが表現するものである」という形式をもつ。しかもこれはそのまま同一なのではなく、異なるものでありながら、同時に一致しているということである。このような点をラカンは、日本語のような「嘘を媒介」とする、つまり嘘が嘘とはならない言語を話す人々は「精神分析される必要がない」[55]、と書いているのではないだろうか。

以上のように考えるならば、ラカンの「シニフィアン」と西田の「個物」とは、その立脚点の相違によって全く逆方向から辿り、同様の場所で出会ったものであるといえるであろう。

6. 相同性から相違性へ――おわりに

以上、本論では、ラカン・西田の言辞について比較した結果、多くの相同性が見いだされ、一つの構造をなすことが明らかになった。

共通しているのは、両者にとって通常の意味合いにおける論理とは、通弊とは逆に、「欲」という必然的な置き換えによってはじめて作動し始めるものだということであり、それも我々が欲するのではなく、もはや既に置き換えられていることによってであ

り、これによってようやく通常の論理における同一性を扱うことができるという構造をもっているということである。その成り立ち自体を捉えたのが、彼らの独特な論理なのであった。

こうして、形式的には同様の構造を成すように見なし得る両者の論理であるが、その適用対象を比較してみると、ラカンの「無意識」「他者」「欲望」と西田の「無」「他」「欲求」とで、ラカンの方はいずれも「人格」をめぐる議論であるのに対して、西田の方は必ずしも人格に限られるものではない。一見して、この点が実在に関する大きな分岐点であるが、基本構造の比較を通して、最後に見たように、ここにある本当の相違とは立脚点の相違である。つまり、西田の場合、いわば自身が人格の位置にあるのだといえる。このような相違から、ラカンはあくまでも治療家として対象である人格と適切な距離を保つことができ、西田は我々一人ひとりに寄り添う生の現実を捉えることができる、といったそれぞれの目的を遂行する論理となっているのである。

だが、彼らの実在観には、未だ重要な問いが潜在している。甚本構造を捉えた本論では以上のようにひとまずこれを立脚点の相違として考えられることを指摘できたが、それはラカンが根本に据えたように、言語の構造によるものであるのか、[36] また例えば西田が提示するような西洋の主知主義に対する東洋の知行合一、といった伝統文化によるものであるのか、あるいは更におそらく両者の視野にもあったであろう、文化や時代を超えた普遍的な構造――それはあるのか否かを含め――を考えるための一助ともなるのではないだろうか。

○引用文、本文中とも傍線・傍点は全て筆者による。
○西田については、『西田幾多郎全集（新版）』二〇〇〇～を参照。〔巻数（漢数字）〕－〔頁数〕と記す。
○ラカンについては、"Le séminaire de Jacques Lacan. Livre 11:les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse", 1964 (Seuil, 1973)、小出浩之、鈴木国文、新宮一成、小川豊昭・訳『セミネール 11・精神分析の四基本概念』岩波書店二〇〇〇を参照。S11-〔原著頁数〕、〔邦訳頁数〕と記す。訳文に則りながら、適宜原語と別訳を補った。
○その他は書名を記す。

(1) 木村敏「西田哲学と医学的人間学」一九九三『木村敏著作集7』所収、等多数。
(2) 荒谷大輔『西田幾多郎―歴史の論理学』講談社二〇〇八
(3) 石澤誠一「フロイトの判断論」日本ラカン協会発行『L.R.S. ジャック・ラカン研究』二〇〇三所収等
(4) S11-127, 182
(5) 九-97, 八-255
(6) S11-27, 30
(7) S11-28, 32
(8) S11-32, 38
(9) 『音の研究』ではエルザレム、『絶対矛盾的自己同一』では、E.v. ハルトマンといったフロイト以外の名を冠して「無意識」という語は記述されている。但し、西田の蔵書にはフロイトのものもあった。

『夢判断』一九〇〇『精神分析について』一九〇九『精神分析入門』一九一七がそれである。その影響は「夢の強度」などに言及した論文に見られる。八-285

(10) 八-423

(11) 八-423 十-330

(12) S11-78, 109

(13) S11-164～, 239～

(14) S11-204, 302

(15) S11-73, 102

(16) S11-204, 302

(17) 十-119

(18) 十-300

(19) 九-469「まず何処かに表現するものが表現せられるものであるという自覚的実在の形式がなければ、表現ということは成立しないのである」

(20) S11-79, 111

(21) S11-11, 8 ラカンは自身の精神分析について「実践」という語を好意的に採用している。

(22) S11-95, 136

(23) S11-71, 99

(24) 機序の詳細は、片山文保「絵画と構造—ラカンの『ラス・メニーナス』論をめぐって」『T.R.S.』二〇〇六参照

(25) 三-429 この時点では、「映す」とは「鏡」とは違って「ものを歪めない」としている。

(26) 八-197 等

(27) 三-283 及び八 -373

(28) 三-404

(29) 九-473

(30) 即非と鏡の関係については、井上克人「経験と超越——禅における〈覚〉とその既在的直接性について」『日本の哲学・7』二〇〇六所収参照

(31) 八-124

(32) S11-61, 81

(33) S11-141, 201

(34) S11-77, 108

(35) 九-503

(36) 八-149

(37) S11-180, 264

(38) S11-199, 294

(39) S11-46, 60

(40) S11-28, 33

(41) ラカン「論理的時間と予期される確実性の断言」"Écrits" Éditions du Seuil1966 邦訳：『エクリ』弘文堂一九七二所収

(42) S11-46, 60

(43) S11-55, 74

(44) 十-299

(45) 八-385

(46) 八-388

(47) 八-373

(48) 九-475

(49) 九-478

(50) 九-468

(51) アルノー宛書簡に見られる。p357『ライプニッツ著作集・8』工作舎一九九〇、ライプニッツの「表現」解釈に関しては、石黒ひ

で『ライプニッツの哲学』一九八四参照

(52) 「人工言語」の創出に尽力したライプニッツもまた「自然言語」をも重視したという。酒井潔「ライプニッツの自然言語論――その哲学的前提によせて」二〇〇七『水声通信』一七号所収参照

(53) S11-60, 82; S11-, 206 等

(54) 11-141, 202 欲望は換喩的であるという S5『無意識の形成物』に詳しい

(55) 『Ecrits』邦訳に寄せられた序文。ラカンと日本については、佐々木孝次『文字と見かけの国』太陽出版二〇〇七等参照

(56) 浅利誠『日本語と日本思想―本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人』藤原書店二〇〇八参照

（いしざき・けいこ、国際日本学、お茶の水女子大学大学院）